

青陵



今号のビッグニュース

開校初！青陵祭体育の部を屋内開催に切り替え（12面）

校長 泉 浩明 (名誉会長)



4月に校長として赴任いたしました泉浩明と申します。同窓生の皆様には、平素より母校に対する深い愛情とともに、多大なご支援とご協力を賜り心より感謝申し上げます。

本校の使命は創立以来、諸先輩方が大切にしてくられた「自主・責任・挑戦」の志を受け継

社会の発展に貢献できる人材を

ぎ、「文武不岐」「自主自律」の精神を土台に、社会の発展に貢献できる人材を育成することであると考えております。

この使命を果たし、同窓生の皆様方にとって青陵高校が「誇れる母校」として在り続けるよう、今後も教職員が一致団結し教育の充実に努めてまいります。どうぞ母校への変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

【略歴】 いずみ・ひろあき 美咲町(旧柵原町)出身。津山高校から岡山大学大学院教育学研究科修了。専門は数学。瀬戸南を振り出しに笠岡教頭、青陵教頭・副校長を5年。玉野商工校長から第24代青陵校長として着任。岡山市在住。

同窓会会長 岡田 展弘 (25期)



会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。また、同窓会運営に何かとご支援、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。コロナ禍がほぼ終息、昨年に続き本部、各支部の総会をすべて無事に開催することができ、大変慶ばしく思っております。

若い会員へのバトンが課題

一方で、同窓会を運営するにあたり課題も出てまいりました。いかにして若い世代の会員にバトンをつないでいくかもその一つです。直ちに課題を解決することはできませんが、皆様のご意見を伺いながら今後の同窓会運営を、より実のあるものにしたと考えています。会員の皆様には、更なる母校発展のため一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ごあいさつ

同窓会本部総会

(令和6年8月4日、倉敷アイビースクエア)

災害級の暑さといわれる日本列島でしたが、今年も県内外のOB・OG約200人が元気に集いました。

総会では岡田展弘会長(25期)が「暑い中、ご参加いただき、ありがとうございます。当番幹事の方々ご苦労さまでした。ごゆっくり涼んでいってください」とあいさつ、泉浩明名誉会長(校長)が「お招きいただき、ありがとうございます。現役は定員320人ですが75%の240人が国公立大学に合格、部活も今夏、インターハイへ剣道部女子、競技かるた部も全国大会へ出るなど文武不岐の精神で頑張っています。グローバルに活躍する人材の育成に努めています」と、学校の現状報告をしてくれました。

議事では2023年度行事・決算報告と監査報告を承認、2024年度の行事・予算を審議して原案通り承認されました。

会計面の変更点として、同窓会だより

掲載の広告収入を、2024年度より従来の「総会会計」から「同窓会だより会計」に繰り入れることとしました。同窓会だよりの発行・配布に役立てるためです。



旧友と再会、盛り上がる同窓会本部総会の懇親会

総会を終え懇親会に移る前に、司会者・妹尾(旧姓小郷)美穂子さん=31期=の歌のミニコンサートがあり、のびやかな美声に聞き入りました。

懇親会では、久々に会った同期や先輩・後輩、先生方と積もる話を繰り広げ、愉快的ひとときを過ごしました。

あっという間にフィナーレとなり、「このために来た?」という東京青陵会顧問・武本幸寿さん(25期)のリードで校歌を全員で大合唱、閉会しました。

□…当番幹事の5、15、16、25、35、36期の皆さん、ご苦労さまでした。

炎暑の中、200人元気に

懐かしい青陵高校へ10年ぶりに帰り、3年間お世話になりました。歴史と伝統を誇る素晴らしい学校で、真面目、前向

退任 内田博文前校長

メッセージ

き努力、新しいことにもチャレンジする力のある生徒が多くなりましたね。今後高い志を持って社会に貢献、けん引する人になることを期待しています。



料理に、おしゃべりに…

季節の歌メドレー披露

♪春のうらの墨田川…。総会と懇親会の合間に、長年司会を担当している妹尾（旧姓小郷）美穂子さん＝31期＝が軽やかな歌声を披露してくれました。会場は総会の緊張感から一転、和やかな雰囲気になりました。



季節の歌メドレーを披露する妹尾美穂子さん

女声コーラスグループ「La Voce」を主宰する妹尾さんは白いドレス姿で、まず、今年

のNHK大河ドラマ『光る君へ』に登場する清少納言の代表作『枕草子』の有名な冒頭「春はあけぼの…」を感情込めて朗読しました。

次いで、その内容に沿って季節の歌「花」「夏は来ぬ」「里の秋」「ペチカ」の4曲をピアノ伴奏によりメドレーで歌い上げました。

最後に、聞き慣れたシャンソン「オー・シャンゼリゼ」のアレンジで「オー・セイリョー」を全員でにぎやかに歌っ

て締めました。時間にして20分、参加者は本格的な声楽を堪能しました。

同窓会役員からの出演依頼に、「ええっ、（前年の）松本和将さん＝49期＝の後？！」と驚いたようですが、司会とミニコンサートの二刀流、を見事にこなしました。ご苦労さまでした。

妹尾さんは8月末には「La Voce」を率いて「全日本おかあさんコーラス大会」（札幌）に参加しました。令和7年1月5日には倉敷国際ホテルでランチコンサートを予定するなど、司会業と声楽で大活躍しています。

司会の妹尾（旧姓）美穂子さん＝31期＝



フィナーレの校歌斉唱をリードする武本幸寿さん



九州青陵会の参加者

参加者が減り悩み

今回の日程は3連休の初日に当たりました。多くの人が出席しやすいように、次回から11月に開催することに變更する予定です。九州、山口からの参加を待っています。

（令和6年10月12日、福岡・西鉄グランドホテル）第15回総会を開きました。本部同窓会から岡田会長、泉校長、事務局・林先生、九州大学と福岡教育大学の現役学生2人を含む計10人が参加しました。昨年よりもさらに

加藤九州青陵会会長は

「これまででは少し残金がありましたが、料理代や通信費がけっこうかかりピンチです（笑い）」と悩んでいます。

九州青陵会

表紙の洋画作者

木口敬三さん

（11期）

洋画家・木口敬三（本名賢太郎）さん＝11期、写真の「風と動きの心象風景展」が令和5年11～12月の6日間、天満屋倉敷店で開かれました。同店で隔年に1回の恒例展です。



倉敷で恒例の心象風景展

今回は心象風景を中心に銅版画5点を含む新作・旧作29点を展示しました。その中の1点「おどる鋪（しき）石」は青基調の中で風に動く紙の鋪石から生

命を表現しています。初日から自宅の画塾の教え子（大学生）ら大勢の関係者や美術ファンが訪れ、熱心に見入っていました。木口さんは中学、青陵を通じて美術部でした。□：青陵高校体育館のステージの緞帳は木口敬三さんのデザインです／長女裕香さんは47期、次男賀之（よしゆき）さんは55期です。

〈表紙の作品〉

洋画家・木口敬三さんの作品「鋪（しき）石」。木口さんは武蔵野美術大学を卒業後、フランスに3年留学。帰国後、心象風景や版画での表現活動60年。スウェーデン国際版画展優秀賞など受賞多数。中国デザイン専門学校（岡山市）の非常勤講師を30年務める／背景写真は校門付近から校舎を望む。

東京青陵会総会・懇親会



元気に集った東京青陵会のメンバー
ルポール麹町

支部だより

東京青陵会

(令和6年6月8日、東京・ルポール麹町)

「12年前に初参加してから毎年ずつと出席しています。今は理事です。青陵時代、部活には入らず、小4で始めた少林寺拳法を高2まで8年間続け、全国大会に3回出場しました。初段の黒帯です。旭化成(株)に就職、合成ゴム『エラストマー』の配合加工研究を通じた素材の用途開発に

参加者ひとこと

12年前から連続出席、理事に

携わっています。ほぼこの仕事一筋で、会社人生の80%を占めていますね。特許も年1、2件出願しています。顧客訪問で中国など国内外に出張、倉敷にも行きますよ。管理職ですが、じつとしていません」
(倉敷市出身、横浜市在住)

総会の案内を前回までは郵送で行っていましたが、今回から電子メールと東京青陵会ホームページによる案内・告知と
事務局長 日岡 秀和 (30期)
のことは会の案内で昨年お知らせを行い、電子メールアドレスの登録をお願いしていました。

また13年ぶりに

メールとHPで案内、参加60人

盛り上がる懇親会



場を変更することにより、今年の参加費11,000円を8,000円に下げることができました。繰越金が年々減り、会の存続が危ぶまれてきたため郵送案内をやめ会場を変えました。その甲斐あって参加費を下げて黒字となり健全な収支で運営できるようになりました。

前置きが長くなりましたが、今回は来賓を含めて60人にご参集いた

き、総会・懇親会を開催しました。来賓としてご出席いただいた泉校長、岡田本部同窓会会長、金谷同副会長、倉敷市東京事務所の木村所長、本部同窓会事務局の林先生、そして会場に足を運んでくださった東京青陵会の皆さま、誠にありがとうございました。

料理を食べるのを忘れるくらい会話がはずみ、デザート之余のテーブルがたくさんあったようです。集合写真を撮影後、来年の再会を誓いお開きとしました。

金谷副会長には急なお願いにもかかわらず、校歌斉唱の演舞を担当していただき感謝しております。

関東近辺にお住まいでメールアドレス登録をされていない方は、「東京青陵会ホームページ」(<https://tokyo-seiryu.jp>)より行ってください。今回の参加案内をします。

メールアドレス登録お願い

同窓会在京連絡協に加入

日岡さんら役員参加

東京青陵会(高橋祥二会長)は令和6年6月、港区のとつとり・おかやま新橋館で開かれた岡山県高校同窓会在京連絡協議会の総会に出席、加入を決めました。

同協議会は前年から岡山県東京事務所の主導で立ち上げを進め、同窓会在京会役員を会員として正式発足しました。青陵会役員への参加要請に応じたものです。

総会には、青陵会から日岡秀和事務局長(30期)

活動ぶり吸収へ

ら2人が出席、新会員として紹介されました。規約改定後、代表世話人の水口信一(西大寺高校同窓会東京支部顧問を初代会長に選出しました)。

会員は朝日、西大寺、新見、玉島、津山、高梁、岡山南、岡山東商、林野、玉野、操山邑久に青陵が加わり13校です。

日岡事務局長は「冊子を作成している学校がありますが、費用や配布人数面から、とても真似ができません。支部の行事・活動、若い世代の同窓会参加策などのノウハウを吸収する場として付き合っていきます」と話しています。

幹事 藤田桂子(35期)

京大大学院教授・中務真人さん(33期) 講演

令和6年度の近畿青陵会総会は昨年引き続き、KKRホテル大阪で5月26日に開催しました。出席者は、来賓4人を含め7期から52期までの計69人でした。今年役員改選がなく、会計報告と予算案が満場の拍手で承認されました。

来賓として、今年4月に着任した泉浩明校長からご挨拶をいただきました。後輩たちが、勉学はもちろん競技かるたや野球など、さまざまな分野で活躍している様子や、DX(デジタルトランスフォーメーション)の教育予算を獲得し、新しい時代に踏み出しつつあることを報告されました。さらに、岡田展弘本部同窓会会長(25期)は、ご挨拶の中で37期以降の若い方々の参加が同窓会の課題であることを指摘されました。総会に続き、細田貴道同副会長(31期)の乾杯発声で懇親会に移りました。

間近に大阪城を望む明るい会場で、持参した卒業アルバムを仲間と一緒に見る人もいました。円卓のあちこちから談笑が起き、一気に高校時代に戻ったようです。

特別イベントとして、京都大学大学院理学研究科の中務真人教授(33期)に「私の仕事ーアフリカ・化石・発掘」と題したミニ講演をいただきました。

中務先生は青陵時代、山岳部で同期の皆さんが、近畿以外からも大勢駆けつけました。司会の中川京子さん(35期)が円卓を回り、山岳部の方々や、一人で参加してくれた最若手、52期の伊原(旧姓徳永)有紀さんへのインタビューをしました。軽妙なやり取りに、会場はいつにも増して盛り上がりました。最後に恒例の校歌斉唱をしました。ご来席の皆様には深謝いたします。

来賓は5月25日(日)に開催する予定です。担当幹事は27期、28期です。奮ってご参加ください。

69人参加、盛り上がり例年以上



昨年より多い69人が参加した近畿青陵会総会
KKRホテル大阪

中務教授・類人猿研究30年

京都大学大学院理学研究科・中務真人教授の講演は、専門の人類学から「私の仕事ーアフリカ・化石・発掘」というテーマでした。研究領域の1千万年から700万年前に生まれたゴリラ、人、チンパンジーの進化について、スライドを使い20分間、分かりや



類人猿について講演する中務真人さん=小原康正さん提供

「アフリカ・化石・発掘」を熱弁

すく話してくれました。ケニアの人たちと共に生活し、類人猿の化石の発掘と研究を30年以上続けてきました。「知的な好奇心が原動力」という基礎研究の奥深さと現地でのご苦労に思いをめぐらせながら

聴きました。

中務さんは京都大学理学部から大学院理学研究科博士課程に進み、博士(理学)となりました。同研究科の助手、准教授を経て教授を務めています。ほぼ京大一筋の研究生活です。

同じ理学研究科には、青陵の5期先輩で令和6年3月、定年退官した分子生物学の森和俊教授(28期)=現京大高等研究院特別教授=がいました。「会議などで時々お会いしていました。

同じ研究科に青陵が2人いたんですよ。珍しいことでしょう」と言います。

近畿青陵会には初参加の中務さんですが、同期17人が倉敷、岡山、横浜から大挙参集して話に耳を傾けました。

山岳部では中国地方や兵庫をはじめ、立山や槍ヶ岳など多くの山々を制覇しました。同期17人のうち5人は山岳部の仲間でした。

国内で初めて承認、発売されたアルツハイマー病の新薬について令和5年12月、医療テクノロジー・アセスメント研究所長・久繁哲徳(ひさし)医師(19期) 徳島市在住が新聞に寄稿した記事を拝見しました。久繁さんは社会医学専攻で、医療技術評価と医療経済学という特殊な分野の専門家です。

日本の軽度のアルツハイマー病患者は約160万人いて、製薬会社によると、そのうち5万~6万人が投薬対象です。久繁さんは「アルツハイマー病の進行を遅らせる新薬『レカネマブ』が承認されましたが、薬の効能に多くの疑問点があり検証が必要で、迅速な承認はやや不可解です」と指摘、「極めて市場規模の大きい薬ですが、効果が不明確な薬剤は承認す



久繁哲徳さんの新聞寄稿文(顔写真は久繁さん)=令和5年12月3日付山陽新聞

「効果不明確 承認に疑問」

「極めて市場規模の大きい薬ですが、効果が不明確な薬剤は承認すべきではありませぬ」

12月1日、わが国の科学者の代表機関「日本学術会議」の会員に任命されました。任期は6年です。

森京大教授(28期)日本学術会議会員に

会員は人文・社会科学を含む幅広い学術分野から選ばれた210人で、最高峰の優れた業績をもつ研究者ばかりです。森さんは細胞内の異常なタンパク質を検知、修復する仕組み「小胞体ストレス応答」のテーマと出合って35年、ノーベル賞候補と目されて10年になります。

久繁さんは岡山大学医学部を卒業後、徳島大学医学部教授となり、世界保健機関(WHO)欧州地域事務局顧問などを歴任しました。青陵時代は美術部で、岡山大学特設美術科募集のコンクールで特選になったこともあります。

ノーベル賞劇作家の初の邦訳書を刊行

ぶりを語っています。従って、巻末の30頁に及ぶ解説文は単なる作家と訳者を超えた濃い内容です。「私はあくまでフォッセの影のサポーターです」と謙虚ながら、彼の人間性への深い理解から作品の深層にまで迫っています。河合さんの妹の友人、小寺(旧姓安田)三喜子さん=12期=は「学校時代から優秀でアメリカに留学、ギリシャでも仕事をし、ドイツに定住しました。毎年春、桜を見に総社市の妹宅に帰省していましたが、今年(令和6年)は都合で帰れませんでした。『地下のベルリン』という著書もありますよ」と、半生の歩みを話してくれました。

□…本稿は令和5年10月12日付、同6年2月18日付の各山陽新聞を参考にしました/写真はインターネットより/河合さんは令和6年夏、亡くなられました。



翻訳家・河合純枝さん(10期)ドイツ在住

令和5年秋、ノーベル文学賞受賞劇作家ヨン・フォッセ(ノルウェー)の初の邦訳書『だれか、来る』が刊行されました。その翻訳者が新聞記事などから河合純枝さん(10期)=写真=と判明しました。同書は、一組の男女を軸に展開する観念小説の表題作に加え、エッセー一編を収録しています。新聞記事によると、河合さんは岡山大学を卒業、結婚してドイツのベルリンで翻訳家として活躍しています。中でもフォッセの作品を長年手がけてきた人で、20年来の親友です。「共に舞台を観て共に語り、共に食し共にバカンスを過ごし、信頼のおける長いおつきあいである」と、親密な交流

現代アートを収集する㈱クラビズ社長・秋葉優一さん(47期)が令和6年4月、アートの発信拠点を倉敷一番街商店街の自社ビル(倉敷市阿知)3階にオープンしました。ウェブ制作や衣料品販売に次ぐ新規事業です。

施設を「KAG(カゲ)」(KURASHIKI AVANT-GARDE)と名付けて、人種、ジェンダー、紛争などをテーマに、創作する国内外の作家を取り上げます。映像、音楽、インスタレーション(空間芸術)といった多彩なジャンルの作品を随時紹介していきます。

こけら落としには、現代アートをけん引する米国の写真家ナン・ゴールドインの半生を描いた映画、雑誌『美術手帖』の編集長らの公開講座がありました。珍しいスペースのオープンに、多くのアートファンらが訪れました。

5月にはアーカイブ展を開催して、1960年代に米国のアーティストらで結成し、労働や紛争問題と向き合った「アートワーカーズ連合」の活動ぶりを紹介しました。

親交のある大学准教授と相談しながら立ち上げた秋葉さんは「アートを通じて世界の課題への関心を促す場になれば幸いです」と抱負を述べていました。

今や、多角的新規事業を次々開拓する気鋭の事業家です。

秋葉さんは青陵時代、3年間サッカー部に所属していましたが、「チームがあまり強くなかったので華々しい思い出はないですね」と残念がります。青陵祭ではクラスの仲間5人とバンドを組みギターとボーカルを担当、オリジナル曲を演奏しました。

一つ先輩に(「東京事変」の)伊澤啓太郎(一葉)さんがいたそうです。

□…本稿の一部は令和6年4月19日付山陽新聞を参考にしました。

会社経営 秋葉優一さん(47期)



アーカイブ展を企画した秋葉優一さん(令和6年5月、KAG)

藤原素子さん(36期)

シャンソンの祭典「岡山パリ祭2023」が、令和5年10月28日に岡山市のルネスホールで開催され、この道25年の藤原(現姓松山)素子さん(36期、東京都在住)が里帰り出演しました。藤原さんはソロで「三つの小さな音符」、デュエットで「ラスト・ワルツ」、合唱も含め計6曲を、声量豊かな低音で情感たっぷりに歌い上げました。シャンソンの魅力を聴衆に披露、1曲「3分間のドラマ」に大きな拍手が起きました。

岡山パリ祭常連歌手



情感たっぷりに歌い上げる藤原素子さん(令和5年10月28日、岡山市のルネスホール(小島道義さん提供))

パリ祭はシャンソン歌手・石井好子(故人)

が東京で始め、石井と親交のあった元五輪競泳選手・木原光知子(4年)に岡山へ誘致して31回開きました。今回は地元岡山出身の歌手らが中心になり新体制で開いた1回目でした。

藤原さんは13回目の参加で、岡山パリ祭の常連歌手です。今回は「プロデュースや演出をはじめ出演者もゲストを除いてすべて地元の人たちが自主的に取り組ましました。『岡山への愛』に燃え、話し合いながら手づくりしました」と話してくれました。藤原さんは青陵卒業生では珍しいシャンソン歌手です。

しかも経歴がユニークです。青陵時代は演劇部で、芸術系大学ではない中央大学文学部に進学後は小劇団に所属しました。銀座のバーでアルバイトをしていた時に歌の要望がありました。「歌は苦手だったので先生についてレッスンを受けたんですよ。たまたまジャズとシャンソンの先生だったことからシャンソンにはまりましたね」というきっかけでこの道に入りました。岡山パリ祭は令和5年に続く同6年7月14日にも岡山市の岡山芸術創造劇場ハレノワで開催、藤原さんは2年連続出演、「ジョリー・モーム」など2曲を披露しました。

シャンソンとは ルーツは古く中世ヨーロッパ。日本語でいうと歌謡、小唄の意味。フランスの象徴的な音楽ジャンルであり、世界に普及している。歌詞が物語性を持ち、ストーリーと繰り返しの部分、さらに日常会話もあり、歌手が自分の個性を生かし情感を込めて演じ、歌い上げるのが特徴。